

世界史認識とアジアのミニ・システム：  
海洋史観と港市国家から考える  
(<シンポジウム>いま、アジアから見えてくるもの)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00006820">https://doi.org/10.14945/00006820</a>

# 世界史認識とアジアのミニ・システム

—海洋史観と港市国家から考える—

岩井 淳

はじめに

静岡大学の岩井です。以前から、静岡哲学会のことは存じ上げており、親しくしていただいている人間学の先生方から、その詳細をお聞きすることもあり、一度くらいは報告させていただく機会があるかもしれないと楽しみにしていました。しかし、私は西洋近代史、わけでもイギリス史を研究していますので、まさかアジア史をテーマに報告させていただくことになるとは思っていませんでした。そのような次第で、アジア研究は素人同然ということではなはだ心もとないのですが、本日は、海洋史観と港市国家をキーワードにしまして、第一に私が専門としております歴史学の流れに沿って、海洋史観が登場してきた経緯を簡単に振り返り、第二に西洋史分野でも注目を集めている海洋史観を取り上げ、大西洋世界とインド洋世界という海洋史観の舞台となっている二地域を比較しながら、海域アジアの特色を明らかにし、第三に海域アジアの結節点とも言えるべき、東南アジアのいくつかの港市国家に即しながら、そのあり方を具体的に検討しようと思えます。この三点は、そのまま私の報告の課題となるものです。本論に入る前

に、まず本報告の輪郭のようなものを提示しておきましょう。

この報告では、これまでの世界史認識を振り返り、世界史の中でアジアをどのように位置付けるのが、より適切なのかを、海洋史観や港市国家論といった最近の動向を検討しながら考えたいと思います。従来の世界史認識の問題点を簡潔に記しますと、①ヨーロッパ中心か、アジア中心かという二者択一型が多く、②議論が経済史に偏重する傾向があると云えます。これに対して、近年、①ヨーロッパとアジアの相互関係を問う必要を説くものや、海洋史観や港市国家に注目する研究が現われ、②そこでは、経済や政治だけでなく文化や宗教の役割を重視し、ミニ・システムでの文化伝達力や情報発信力を強調する考えが登場しています。

海洋史観は、タテの時系列だけでなく、ヨコの相互交流を重視する見方で、大西洋を舞台にした研究が顕著な成果を上げています。この見方は、大西洋を往来したヒト、モノ、情報の流れを追跡し、ヨーロッパからアメリカという一方だけではなく、双方向での交流史研究が進展しています。大西洋世界史は、世界システム論を主張したイ・ウォーラステインによっても採用されましたが、最近は宗敎史や政治史にも広がっています。この地域では、アメリカ植民地が、資本主義的な経済システムだけでなく、キリスト敎などを受容し、その支配者にも、ヨーロッパ人が現地生まれの白人（クリオリヨ）がついたことから分かるように、ヨーロッパ的価値観を受け入れることが多かったのです。

大西洋世界史と並んで、アジア研究でも、近年、海洋史観が登場しています。それは、インド洋からシナ海域を中心にした海域アジアを舞台にしたものです。海域アジアでは、一六世紀以降にポルトガル人、オランダ人、イギリス人などヨーロッパ勢力が来航しますが、ヨーロッパの影響は点に限られ、面に広がることはまれでした。ヨーロッパ人は、海域アジアの結節点となる港市国家を拠点にしましたが、現地の支配者に協力を仰ぐことが多かったのです。

大西洋世界とは異なり、海域アジアでは、ヨーロッパ人が直接支配者となることが少なく、在地勢力が長続きし、影響力を保ちました。海域アジアでは、一六世紀以降のグローバル化の流れに対して港市国家のようなミニ・システムが、ある程度まで存続しました。そこに大西洋世界と海域アジアの顕著な違いがあると考えられます。

この報告は、海域アジアにおけるミニ・システムの役割を、海洋史観や港市国家といった視点から検討することを主要な課題とし、最後に、東南アジアに見られる港市国家やミニ・システムの意義を、日本の歴史や現状に照らして考察し、結びに代えたいと思います。

## 1 従来の世界史認識の問題点

最初に、これまでの世界史認識を振り返ってみますと、依然としてヨーロッパ中心の歴史観が強い影響力をもっていることが分かります。欧米では一九世紀以来のランケ史学やマルクス主義史学がヨーロッパ中心史観の代表的なものであり、日本ではランケ史学やマルクス主義史学の移植と導入によって発展した明治以降の歴史学、戦後の大塚史学などが、その代表的なものです。「戦後歴史学」と総称される日本の歴史学の中には、帝国主義時代を中心にアジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの独自の役割に注目する研究もあり、簡単にはヨーロッパ中心史観と言えませんが、基本的にマルクス主義史学の社会構成体論を基軸とした一国史観（タテの時系列史）をとることが多く、その意味で国際的な相互関係（ヨコの関係）をとらえることに弱点がありました。

しかし、一九六〇年以降になりますと、従来のヨーロッパ中心史観からの脱却を目指して、一方でフランスのアナール学派を中心にした「社会史」研究が隆盛し、人類学や民族学の諸成果を援用しながら、内側からヨーロッパ文明の

先進性を再検討することになります。他方で、グンダー・フランクやサミール・アミンといった従属学派の研究者が、近代の世界史をアジア・アフリカ・ラテンアメリカといった「周辺部」から問い直すことを提唱し、「中心」の繁栄が「周辺」への収奪の上に成り立っていたことを主張します。植民地や従属地といった外側からヨーロッパ近代の先進性に疑問符を投げかけたことになります。

一九七〇年以降に世界システム論を唱えたイ・ウォーラステインも、従属学派の系譜から登場します。彼は、一六世紀以降の世界史を資本主義的な世界システムの拡大ととらえ、世界システムを「中核」「半周辺」「周辺」という三地域の分業体制ととらえました<sup>①</sup>。世界システム論は、従来の一国史観を克服する方向を指し示したという点で大きな意義をもっています。ただ、そこにも世界各地へのヨーロッパ的経済の浸透を跡付けるという意味で、ヨーロッパ中心の見方が随伴しているように思われます。また、その議論は、文化史や宗教史を取り入れることが少なく、経済史に片寄りがちです。

これに対して、ヨーロッパ中心史観へのアンチテーゼとしてのアジア中心史観とも呼べる見方があります。日本でも、明治以降には岡倉天心や宮崎滔天のアジア主義や、天皇中心の国家建設を正当化した戦前の皇国史観があり、哲学・倫理学分野では京都学派などがありました。こうした見方には、世界史認識とは言えないイデオロギー的なものも含まれますが、近年、アメリカで提唱された二つの観点は、アジア中心の歴史観を打ち出した大変意欲的なものです。

一つは、ジャネット・アブー・イルゴドが一九八九年に書いた『ヨーロッパ覇権以前——もうひとつの世界システム<sup>②</sup>』で、他の一つは、従属学派の研究者としてスタートしたグンダー・フランクが一九九八年に著した『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー<sup>③</sup>』です。前者は、ウォーラステインが唱えた一六世紀以降の近代世界システ

ムに対して、ユーラシア大陸を舞台に、一三世紀にもヨーロッパからイスラーム、インド、東南アジアをへて中国にいたるまで、八つのサブ・システムからなる「世界システム」が存在することを主張したものです。後者は、アブールゴドよりも少し後の一五—一八世紀を主たる対象として、人口・生産・交易・消費などの成長率を分析し、一八世紀半ばまでの中国やインドはヨーロッパよりも経済的に発展しており、ヨーロッパに劣らない世界的な経済圏が存在したことを説いています。

いずれも、出版時に大きな話題を呼んだ力作で、ヨーロッパ中心史観への批判としては積極的な意味をもっています。しかし、私は、これらのアジア中心史観は、ヨーロッパ中心史観の裏返しというような特色をもっており、世界史を特定の地域を中心にして説明しようとする傾向があると思います。問題とすべきは、ヨーロッパとアジア、いずれかの優位性を説くことではなく、ヨーロッパとアジアの相互関係に注目することではないでしょうか。ヨーロッパとアジアが、どのようにして接触し、反発し、戦争や抵抗も伴いながら、どのようにして相互に影響を与えあい、抜き差しならぬ関係となつて今日に至っているのか。こうしたことを問うべきだと考えます。そうした視点を提示するものとして、近年では、グローバル・ヒストリーという分野が登場しています<sup>4)</sup>。これまで紹介したウォーラスティンやアブールゴド、フランクラの研究も、もちろんグローバル・ヒストリーに属しますが、それ以外に、海洋史観と総称できるような研究が、最近、新しい局面を切り開いています。次に、海洋史観の意義を考えてみましょう。

## 2 海洋史観の開いた地平

海洋史観は、一国史のようにタテの時系列だけでなく、国境をこえるヨコの相互交流を重視する見方です。その発

端は、一六世紀の地中海を舞台に、従来の一国史では見えない歴史を、地理的な時間、社会的な時間、個人的な時間という三つの時間概念を駆使して描き出したフェルナン・ブローデルの『フェリペ二世時代の地中海と地中海世界』（一九四九年）に求めることができます。その後、海洋史観は、他の海を舞台にした研究にも転用され、概念的にも豊かになっていきます。地中海は古代から中世にかけて重要な意味をもっていました。一六世紀以降にヨーロッパと異文化が接触するなかで、世界史という場の主役に躍り出るのは、大西洋とインド洋です。

海洋史観は、とりわけ大西洋を舞台にした研究において顕著な成果を上げています。この見方は、大西洋を往来したヒト、モノ、情報の流れを追跡し、ヨーロッパからアメリカという一方向だけでなく、双方向での交流史研究が進展しています。大西洋世界史は、世界システム論を主張したイ・ウオーラスティンによっても採用されましたが、最近では宗教史や政治史にも広がり、一七世紀や一八世紀の大西洋横断的なアプローチが成果を上げています。私も、少し前に書きました本で、一七世紀の大西洋を行き来した千年王国論などの宗教思想に着目して、ピューリタン革命の国際的背景を検討しました。政治史では、一八世紀後半から一九世紀初頭のアメリカとフランスとハイチを結ぶ「大西洋革命論」などが提起されています<sup>6)</sup>。具体的な研究と並んで、海洋史観の理論的な考察も進み、また奴隷貿易などを通してアフリカ大陸も大西洋世界の海洋史に組み込まれています<sup>7)</sup>。この地域の特色として指摘できるのは、アメリカ植民地が、資本主義的な経済システムだけでなく、キリスト教などを受容し、その支配者にも、ヨーロッパ人が現地生まれの白人（クリオーリヨ）が付き、言語も、英語やフランス語、スペイン語、ポルトガル語といったヨーロッパ系言語を採用したことから分かるように、ヨーロッパ的価値観を受け入れることが多かったことです。

他方、海洋史観は、インド洋からシナ海域を中心にした海域アジア史でも重要な意味をもち、貴重な成果をもたらします<sup>8)</sup>。わけても東南アジア史研究において、海洋史観は決定的な意義をもつこととなります。東南アジア地域は、

多くの民族が混在し、相互に征服や被征服を繰り返しており、特定の民族の系譜をたどることが困難な場合もあって、従来の一国史観が、必ずしも有効な指針とはなりませんでした。しかし、国際的な交流に着目した場合、東南アジアは、インド洋とシナ海域を結びつける枢要の地として新たな意味を帯びてきます。そこでは、古代以来、港市と呼ばれる都市国家が商業ネットワークの結節点となっており、上座部仏教やヒンドゥー教、イスラーム教といった宗教が東南アジアに流入する窓口の役割も果たしてきました。

東南アジアが、世界的に見ても重要な位置を占めるのは、とくに一五世紀から一七世紀の「交易の時代」です。この時代を「交易の時代」と呼んで、東南アジアを海洋史観から考察した代表的な研究は、一九八八年と九三年に出版されたカリフォルニア大学ロサンゼルス校のアンソニー・リードの二巻本『交易の時代の東南アジア』でした。リードの研究は、ブローデルの『地中海』の影響をうけており、彼の目的は、東南アジアを各国の集合体ではなく、ひとつのまとまった世界として描くことにありました。日本でも、リードと同じような視点に立つ研究はありましたが、リードはそれを体系化したと言えます。

これらの研究からもたらされた東南アジア像は、要約すると次のようなものです。東南アジアは、ヨーロッパ勢力が現れる前に、すでに同質性をもつ地域として成立していました。リードの言葉を借りれば、東南アジアは「言語や文化の面で多様性に富んでいても、天候や自然や商業の面で多くの同一の力に従わなければならないので、非常に類似した、ひとそろいの物質文化を發展させてきた」のです。東南アジアには、一六世紀になると香辛料や胡椒を求めてヨーロッパ人が来航しますが、それ以前に、この地域は、多様な民族や宗教をかかえながら、まとまっていたということになります。

東南アジアを中心とした海域アジアでは、一六世紀以降にポルトガル人、オランダ人、イギリス人などが来航しま



すが、ヨーロッパの影響は点に限られ、面に広がることはなかったと言えます。当初、ヨーロッパ人は、海域アジアの港市国家を拠点にしますが、現地の支配者の協力を仰ぐことが不可欠でした。ここで想起されるのは、一六世紀に日本に伝来した鉄砲やキリスト教は、いずれも東南アジアや中国の港市を経由して、もたらされたことです。例えば、一五四二年ころに種子島に到来した鉄砲は、西洋式の船に乗ったポルトガル人が日本人に直接伝えたと思われがちですが、それは間違っています。実は、ポルトガル人は、タイのアユタヤから中国式のジャンク船に乗せてもらい、密貿易に参入しようとしたが、嵐に遭ってたまたま種子島に漂着したのです。一五四九年に鹿児島に到着したフランシスコ・ザビエルも、直接ヨーロッパから来たのではなく、インドのゴアを基地にインド布教をおこなった後、マラッカで鹿児島の人アンジローと出会い、中国人のジャンク船に乗せてもらって、キリスト教を伝えたのです。このようにヨーロッパと日本の間には、東南アジアや中国が介在したことを忘れてはなりません。海域アジアは、西洋史とアジア史と日本史を結びつける、言葉を換えればヨーロッパ研究とアジア研究と日本研究を橋渡しする格好の舞台とすることが出来ます。<sup>111</sup>

話を元に戻しましょう。東南アジアなどの港市支配者は、仏教やイスラム教を奉じることが多く、それらを周辺地域に伝えました。大西洋世界とは異なり、海域アジアでは、ヨーロッパ人が直接支配者となることが少なく、在地勢力が長続きし、影響力を保ちました。言語の面でも、ヨーロッパ系の言語がすぐに普及することはなく、現地の言葉が存続しました。一九世紀以降、ヨーロッパ勢力が植民地を広げる中でも、港市支配者や首長といった在地支配者が大きな役割を發揮しました。海域アジアでは、一六世紀以降のグローバル化の流れに対して港市国家のようなミニ・システムが、ある程度まで存続しました。そこに大西洋世界と海域アジアの顕著な違いがあると考えられます。

### 3 ミニ・システムとしての港市国家の役割

これまで少し理論的な話を続けてきましたので、以下では東南アジアを中心に海域アジアの実態を具体的に提示し、結節点となった港市国家の特色を明らかにしてみましよう。

図1「交易の時代の交易圏」を参照していただきたいのですが、東南アジアは、インド洋交易圏、ジャワ海交易圏、シナ海交易圏という三つの交易ルートの中心に位置しています。このうち、インド洋交易圏は東アフリカからアラビア海、ベンガル湾、マラッカ海峡までの海域で、さらにアラビア海交易圏とベンガル湾交易圏に分けられます。ここはアラビア語を話すイスラーム商人の活動によって支えられており、ダウ船と呼ばれる三角帆をもつ外洋船が往来していました。次にジャワ海交易圏は、マラッカから東インドネシアにいたるジャワ海と、その北のシヤム湾（タイランド湾）を中心とした海域で、ブラウ船と呼ばれるマレー人の船によって特徴づけられます。

またシナ海交易圏は、インドネシアから台湾、琉球をへて日本に至る海域で、さらに南シナ海交易圏と東シナ海交易圏に分けられます。ここでは中国人の商人と角型の帆をもつジャンク船が往来していましたが、明朝が海禁政策を強めると、多数の中国商人の活動は非合法となり、密貿易が横行することになります。明朝は、一五世紀初めに三五〇〇隻の船舶を擁していましたが、永楽帝の没後しばらくし、膨張策を放棄してからは、一四四〇年までに、その数を半減させ、一五〇〇年には三本マスト以上の船を建造した者は死罪に処せられることとなったのです。

交易品は時代によって異なりますが、一五世紀から一七世紀の「交易の時代」について見ると、東南アジアからの輸出品は胡椒、シナモン、ナツメグなど香辛料や熱帯産品、金・銀・銅などの貴金属、輸入品はインドの綿製品、中

国の生糸、絹織物、陶磁器、銅銭、日本の金銀などです。東南アジアは、圧倒的に輸出超過の状態にあり、ヨーロッパは銃・火薬などを除いて、東南アジアが欲する重要な商品をほとんどもっていませんでした。

こうした交易圏で結節点の役割を果たしたのが、港市国家です。「港市国家」の概念は、日本では一五世紀の初めに成立したマラッカ（ムラカ）王国を例として、一九八二年に和田久徳によって提唱されました<sup>64</sup>。和田は、海上交通の要衝たる地点に海港ができ、その港の貿易を中心に商業都市が発展し、さらに周辺地域を含んで都市国家が形成されると論じました。これとは別に、一九九〇年に論文集『東南アジアの港市と政体』を編集したカティリタンビールズは、農業社会と商業社会を媒介するものとして港市国家を位置づけ、東南アジアでは紀元前から一九世紀まで、それが通時的に存在したことを強調しました<sup>65</sup>。

確かに、カティリタンビールズが言うように、港市国家は、一世紀から七世紀まで存続したメコン川下流のオケオや七一―一世紀に栄えたスマトラ島のパレンバンなど、古くから存在しました。しかし、それは、一五―一七世紀の「交易の時代」に圧倒的に重要な役割を果たしたことを銘記すべきでしょう。この時代の港市国家としては、大陸部のペグー、アユタヤ、マレー半島のパタニ、マラッカ（ムラカ）、ジョホール、スマトラ島のアチエ、ジャワ島のバンテン、ドゥマック、スラウエシ島のマカッサルなどが知られます（図2「一五―一七世紀の島嶼部における主な港市・政治的中心」を参照）。またヨーロッパ人が来航して、早くから拠点とした港市国家は、バタヴィア、マニラなどでした。

その中でもマラッカは一五世紀に急速に興隆しました<sup>66</sup>。マラッカは、当初、シャムの支配を受けていましたが、一四〇五年に始まる鄭和の大艦隊が東南アジアに派遣されると、明の朝貢国となり、その後イスラーム教を受け入れ、自立化します。マラッカは、インド洋交易圏、ジャワ海交易圏、シナ海交易圏の結節点に位置するという有利な立地

を生かして、港市国家として飛躍的に発展します。マラッカには、「シャールバンダル」と呼ばれる四人の港務長官が置かれ、居留外国人がそれに就くことになっていました。港務長官は、それぞれ、①グジャラート（インド西部）地方、②マラバール（インド西岸）やコロマンデル（インド東岸）、ベンガルなどの地域、③東南アジアの島嶼部、④中国や琉球などの東アジア地域を担当しました。このうち①と②はインド洋交易圏に、③はジャワ海交易圏に、④はシナ海交易圏に対応することになります。この時代、東南アジアの諸港における関税は一二％ほどでしたが、マラッカは、ベンガル湾よりも西から来た商人には、積み荷に六％の関税を課し、若干の貢物を要求しました。さらに中国など東方から来た商人には、関税を免除し、貢物だけを要求するという破格の条件を設定しました<sup>17)</sup>。今風の表現をすれば、マラッカは「自由貿易港」ということになります。その他にマラッカは、イスラーム教を信奉し、東南アジアをイスラーム化するのにも貢献しました。

マラッカに一極化した交易ネットワークは、ポルトガルによる一五一一年の軍事占領によって徐々に変化し、多極化の時代へ向かいます（図3「ポルトガル占領時代のマラッカ」を参照）。マラッカは、さらに一六四一年、ポルトガルに代わってオランダの支配を受けます。新しい拠点として、パタニ、ジョホール、マカッサル、アチエ、バンテンなどの港市国家が台頭し、その他にペグー、アユタヤ、バタヴィア、マニラなどが成長します。一八一九年、イギリス人トマス・ラッフルズによって建設されたシンガポールも、港市国家の形態をとったことを付言しておきます。

次に港市国家の政治的特色に目を移しましょう。港市国家では、王やスルタンなど在地の支配者が交易主体となるのが、ほとんどでした。支配者は、臣下が商人となって直接交易することを恐れ、法的にそれができないように縛りをおけることが多かったようです。代わりに港市国家で活躍したのは、アラブ人、インド人、中国人、トルコ人、ヨー

ロッパ人などの外国人でした。この点は、前述したマラッカのシャーバンダルと呼ばれる港務長官の任命にも当てはまります（これについては、図4「アユタヤの街区」を参照）。

最後に港市国家の文化的特色に触れましょう。通常、港市国家は近代の国民国家などと比べて遅れた存在と見なされ、その支配者も、ヨーロッパ人から「野蠻」な権力者として恐れられることがありました。実際に港市国家の支配者は、後背地に「異界」が存在することを示唆し、外来者を恐れさせ、仲介者として自分達が果たす不可欠の役割を強調しました。「異界」の存在は、外来者が足を踏み入れるとたちまち殺され、食されるという「人喰い」風聞や、風によつて女が妊娠し、男が生まれるとすぐに殺されるという「女人が島」の伝説によつて、一五―一七世紀になつても盛んに説かれました。この点は、弘末雅士の近著『東南アジアの港市世界』岩波書店、二〇〇四年に大変詳しく紹介されています。

いくつか例をあげましょう。「人喰い」風聞は、すでに二三世紀にアジアを旅したマルコ・ポーロにも知られていましたが、ヨーロッパ人との接触が頻繁になる一五―一七世紀には、よりエスカレートします。一四三五年に東南アジアの胡椒産地を訪れたニコロ・デ・コンティは、次のような記述を残しています。「コンティは、ゼイラム（スリランカ）からタプロバナという島（スマトラ島）にある立派な町へ渡つた。……コンティは、そこに一年間滞在した。その町の周囲は六マイルで、その島の商品を取引しているたいへん高貴な町である。……コンティが言うには、タプロバナは周囲が六〇〇〇マイルある。人々はたいへん残忍で、習慣は野蠻である。……この島のバテックと呼ばれるところに、人食いが住んでいて、つねに彼らの近隣の人々と戦いを行う。彼らは、頭蓋骨を宝物として保持する。なぜなら、彼らは敵を捕らえたと首を切り落とし、その肉を食べ、頭蓋骨を貨幣のかわりに使うために蓄えるからである」<sup>10</sup>。この「バテック」というのは、北スマトラの内陸部にあたり、金や胡椒の産地でした。コンティは、スマトラ島に

あると思われる「立派な町」には滞在したが、そこで聞いた「人喰い」風聞のために、ついに「バテック」には足を踏み入れることができなかつたのです。この話と同種の「人喰い」風聞は、たくさん存在しました。そこで核心となるのは、内陸民の「人喰い」の話を来訪者に信じ込ませるのに最も貢献したのが、港市に居住した人々という点です。ここから、港市の人々、とくに港市支配者が外来者を恐れさせるために、意図的に「人喰い」風聞を広め、自分達の役割を印象付けたという解釈が可能になります。

また、「女人が島」が東南アジア海域に存在するという話も、一六一一—一八世紀に盛んに説かれたことが知られていません。例えば、一五二九年にスペインを発つたマゼランの遠征隊に加わつたピガフェッタは、二一年に東部インドネシアに差し掛かつたころ、現地の水先案内人から次のような話を聞いています。「大ジャヴァの下にオロロンという島があり、そこには女だけしか住んでいない。風が女たちをはらませる。生まれてきたのが男の子であれば殺してしまい、女の子であれば育てる。もし男がその島に近づくことがあれば、女たちに殺されてしまうということだ」<sup>10</sup>。こうした話から、ピガフェッタの一行は、当然ながら恐れを抱き、その島に立ち寄れませんでした。

要するに港市の人々は、「文明」と「異界」を仲介する役割を自任し、実際、そうした存在と見なされました。わけでも港市支配者は、政治的・経済的に権力をもつだけでなく、文化的にも権威をおび、獲得した奢侈品や文化的威信を臣下に再配分することで、地位を安定させました。こうした姿からは、港市が果たした情報発信や文化伝達という役割を知ることができます。港市国家は、従来、国民国家などと比べて遅れたものと解釈されてきましたが、単純にそう断言することはできません。港市の人々は、ヨーロッパ人などの外来者としたたかに渡り合い、時には「人喰い」風聞なども利用して、自分達の役割を印象付け、ヨーロッパ人を内陸部から遠ざけたのです。ここから、海域アジアにおいて、ヨーロッパの宗教や言語が簡単に伝播せず、アジアの宗教や言語といった独自の文化が粘り強く生き残つ

たこの原因をうかがい知ることができます。

## おわりに

以上、海洋史観と港市国家をキーワードにして、第一に海洋史観が登場してきた経緯を振り返り、第二に大西洋世界とインド洋世界という海洋史観の舞台となつている二地域を比較しながら、海域アジアの特色を明らかにし、第三に海域アジアの結節点とも言うべき、東南アジアの港市国家に即しながら、その意義を具体的に解き明かしてきました。最後に、東南アジアに見られた港市国家やミニ・システムの意義を、日本の歴史や現状に照らして考えた場合、どのようなことが言えるのか、こうした点を提示して私の報告の結びに代えたいと思います。この部分は、学問的な根拠が乏しく、少し飛躍もあるので、聞き流していただいても結構ですが、その趣旨は「東南アジアに見られたような港市国家を、現代の日本に呼び覚まし、復活・定着させる」というものではありません。ましてや、「人喰い」を奨励したり、「女人が島」を再現しようとするものでもありません。それよりも、すみずみまで行き渡っている現代日本の中央集権的な国家システムに対して、ミニ・システムを少しでも再生できないかというものです。

日本では、中世までは分権的なシステムが機能しており、例えば、博多や堺といった都市、朱印船貿易に従事した商人たちは、港市国家の支配者のように、その担い手となる可能性をもっていました。しかし、近世の「鎖国」と呼ばれる海禁政策の後、外来者との形式的な窓口は幕府直轄の長崎に一本化され、自由な交易が許されなくなりました。幕末開港期に薩摩や長州が独自にイギリスと交易したように、例外的時期はありますが、明治政府成立以降は、中央集権的な国家システムが動き出し、ミニ・システムが機能することは難しくなります。

それに対して、二〇世紀以降のアジアでは、香港やシンガポールのような地域が、自由貿易港として発展します。また、韓国や中国といった国家システムが比較的強い地域でも、釜山や上海、深圳、大連などで自由貿易港構想が進展します<sup>100</sup>。こうした現象を見ると、海域アジアを舞台に形成された港市国家の伝統は、今なお生きていると言えないでしょうか。

他方で、日本の現状を見てみましょう。空港行政について言うと、最近では羽田の国際化はありますが、大きな趨勢として「韓国の仁川が日本のハブ空港」と言われるほどの落ち込みを示しています。産業でも、日本は国内市場しか見ない閉鎖的な「ガラバゴス化」に陥っていると指摘されます。こうした背景には、中央集権的な国家システムがすみずみまで行きわたる反面、国際関係や国際情勢が十分に見えなくなっていて、内向きの改革だけが進展して、地域や現場の声が届きにくくなっている現状があるように感じられます。最近の尖閣諸島の問題に見られる日本の外交政策は、その最たるもののように思われます。

打開策は、小学生から英語を教えたり、センター試験で「リスニング試験」を設けるような画一的な「国際化」教育でいいのでしょうか？ 静岡大学でも、文科省の方針に従って、海外からの留学生を増やしていますが、他方で憂慮されるのは、今の学生が、留学、旅行を問わず、かつてのように海外に行かなくなっている現状です。

むしろ都市や大学を拠点として、ミニ・システムを再生させる必要があるのではないのでしょうか。都市や大学と言えば、かつては「自治の場」でしたが、今は中央集権的な国家システムのもとで疲弊し、独自の役割を失いつつあるように感じられます。今こそ日本の都市や大学は、自治を取り戻し、ミニ・システムを機能させる受け皿づくりと主体的に取り組み、国際情勢に敏感に対応できるように訓練の場を再生させる必要があると思います。

東南アジアの港市国家の例に学ぶならば、そこでは、経済や政治だけでなく、文化や情報の発信力も問われていま



す。話を地域に引きつけると、静岡の場合、お茶や缶詰、自動車や楽器、プラモデルといった特産品に頼るだけでなく、情報発信をする必要があると思います。その場合、やや唐突ですが、茶文化や富士山などを「異界」として利用できないかというのが私の発想です。この場合、「異界」とは、かつてのように人々から恐れられるものではなく、むしろ人々を魅了してやまない「別世界」と言い換えることができます。都市も大学も、「異界」を利用しながら、それ自体が特色ある「別世界」になる必要があるでしょう。静岡大学はもちろんですが、静岡大学哲学会やアジア研究センターが、そのための受け皿となることができればと願ってやみません。

## 註

- (1) I. Wallerstein, *The Modern World-System I*, New York, 1974 [川北稔訳『近代世界システム』1・2、岩波書店、一九八一年]; I. Wallerstein, *The Modern World-System II*, New York, 1980 [川北稔訳『近代世界システム一六〇〇—一七五〇』名古屋大学出版会、一九九三年]。
- (2) Janet L. Abu-Lughod, *Before European Hegemony: the World system A.D.1250-1350*, New York, 1989 [佐藤次高ほか訳『ロープス覇権以前——もうひとつの世界システム』上・下、岩波書店、二〇〇一年]。
- (3) A. Gunder Frank, *Reorient: Global Economy in the Asian Age*, Berkeley, 1998 [山下範久訳『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店、二〇〇〇年]。
- (4) 入門書として、水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、二〇〇八年; 水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、二〇一〇年などがあります。
- (5) 岩井淳『千年王国を夢みた革命』講談社選書、一九九五年。
- (6) 川北稔編『岩波講座世界歴史17 環大西洋革命』岩波書店、一九九七年; D. Armitage and S. Subrahmanyam(eds.), *The Age of Revolutions in Global Context, c.1760-1840*, Basingstoke, 2010. 後者の論文集は「大西洋革命論を中心とした、幅広い南アジア

東南アジア、中国の社会変動を扱っています。

- (7) D. Armitage and M. J. Braddick(eds.), *The British Atlantic World, 1500-1800*, Basingstoke, 2002; Bernard Bailyn, *Atlantic History: Concept and Contours*, Cambridge, Mass., 2005 [和田光弘・森丈夫訳『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会、二〇〇七年]。

(8) 日本でも、川勝平太『文明の海洋史観』中央叢書、一九九七年や白石隆『海の帝国』中公新書、二〇〇〇年において海洋史観が提唱されました。川勝著のタイトルは、梅棹忠夫『文明の生態史観』中公叢書、一九六七年を意識してのものです。ただ川勝著は、海洋史観と言いつつも、実際に対象となるのはイギリスと日本であり、海域アジアには、あまり論及されず、大西洋世界には、まったく言及されていないという問題点があります。

(9) 東南アジア史の研究動向については、池端雪浦「東南アジア史へのアプローチ」同編『変わる東南アジア史像』山川出版社、一九九四年・桜井由朝雄「東南アジア史の四〇年」東南アジア学会監修『東南アジア史研究の展開』山川出版社、二〇〇九年などを参照。

- (10) Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450-1680*, 2 vols., New Haven, 1988/93 [平野秀秋・田中優子訳『大航海時代の東南アジア』I・II、法政大学出版局、一九九七／二〇〇二年]。

(11) 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、二〇〇八年などを参照。

(12) 以下の記述では、大木昌「東南アジアと「交易の時代」」『岩波講座世界歴史15 商人と市場』岩波書店、一九九九年・鈴木恒之「東南アジアの港市国家」『岩波講座世界歴史13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店、一九九八年を参照。

(13) 石井米雄「総説」『岩波講座東南アジア史3 東南アジア近世の成立』岩波書店、二〇〇一年、五頁。

(14) 和田久徳「東南アジアの都市と商業」『中世史講座3 中世の都市』学生社、一九八二年。

(15) J. Kathirithamby-Wells and J. Villers (eds.), *The Southeast Asian Port and Polity*, Singapore, 1990.

(16) この時代のマラッカについては、岩井淳「交易の時代」の港市国家マラッカ「静岡大学人文学部『アジア研究』六号、二〇〇一年を参照して下さい。

(17) 大木昌・前掲論文、一一五頁。

(18) 弘末雅士『東南アジアの港市世界』岩波書店、二〇〇四年、六八一―六九頁。

- (19) 同上書、八二頁。  
(20) 社説「ハブ港湾」『朝日新聞』二〇一〇年八月二〇日。

(いわい じゅん 静岡大学)

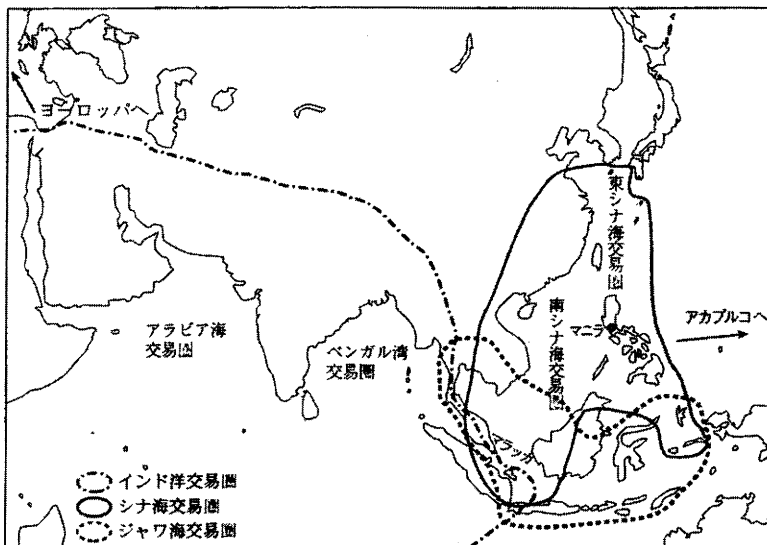


図1 交易の時代の交易圏

出典) 大木昌「東南アジアと「交易の時代」」『岩波講座世界歴史15 商人と市場』岩波書店、1999年、108頁。

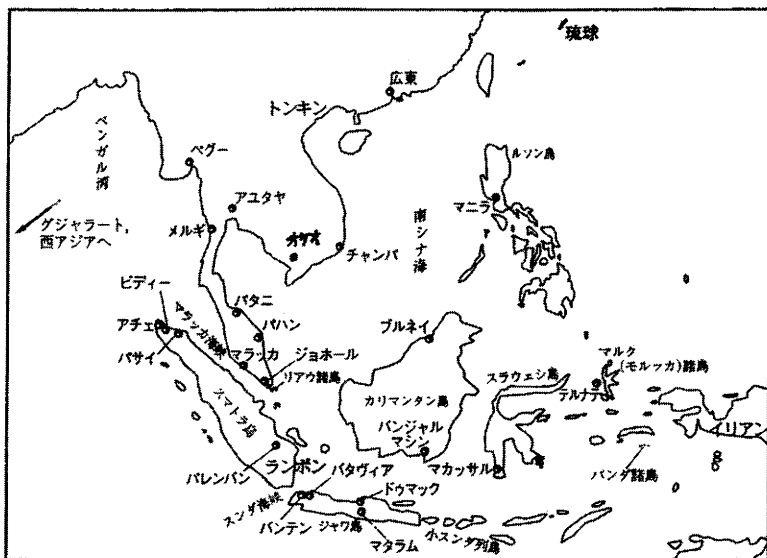


図2 15—17世紀の島嶼部における主な港市・政治的中心

出典) 鈴木恒之「東南アジアの港市国家」『岩波講座世界歴史13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店、1998年、197頁。

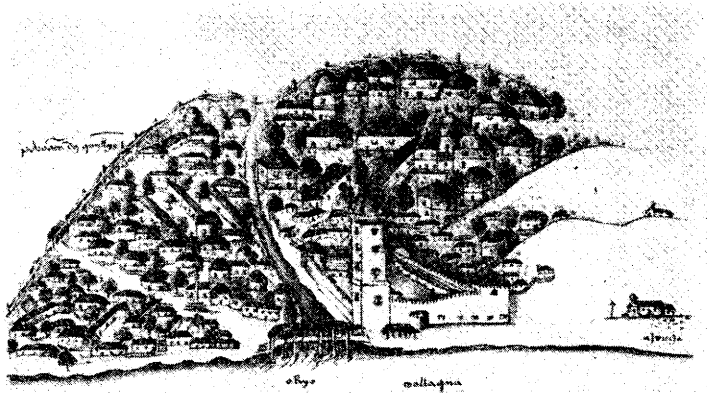


図3 ポルトガル占領時代のマラッカ

出典) 池端雪浦編『新版世界各国史6 東南アジア史II』  
山川出版社、1999年、97頁。

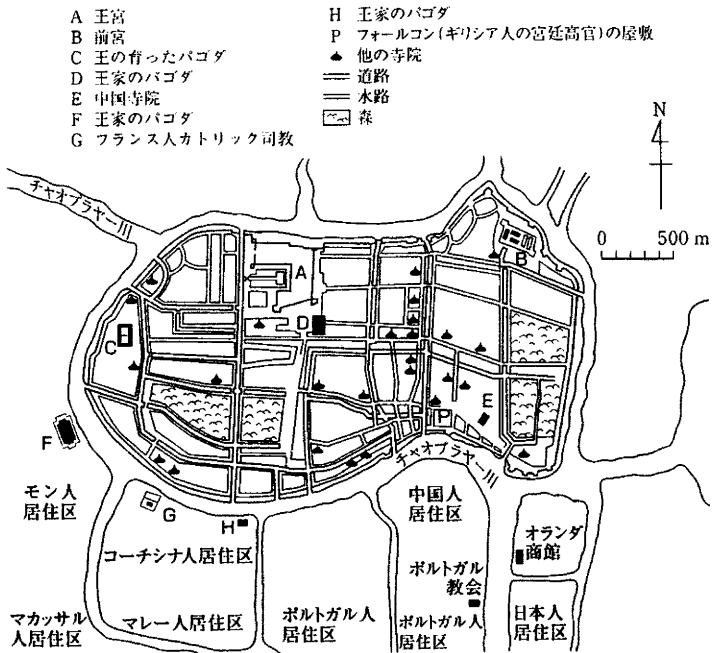


図4 アユタヤの街区

出典) 弘末雅士『東南アジアの港市世界』岩波書店、2004年、34頁。